

# 藤村「嵐」の評判

——所謂「心境小説」の読まれ方——

永 渕 朋 枝

## 序

島崎藤村の「嵐」(『改造』大15・9、「嵐」新潮社 昭2・1に収録)が発表当初から心境小説の傑作として讃辞につつまれたことは、多くの「嵐」論の前提となっており、そこに疑念がさしはさまれたことはない。「嵐」は、母を亡くした子供たちを育てるほぼ七年間の父親の心境を、実生活に基づいて淡々と描いた作品である。「嵐」が「ほとんど全文壇をあげての讃辞<sup>①</sup>」という考えてみれば奇妙な事態を引き起こしたのは何故か。幅広い同時代評を再検討することによって、『新生』(大7・8)から『夜明け前』(昭4・10)に到る契機となる作品と位置づけられる「嵐」を捉え直したい。本論は、所謂「心境小説」の読まれ方<sup>②</sup>の一例でもある。

## 一、評判の推移

「嵐」は発表当初の数ヶ月、確かにほぼ全文壇からの讃辞に包

まれた。『嵐』といへば、近来にない傑作として、好評噴々たる観がある」(水守亀之助「厄日前後」『時事新報』大15・9・7)、「本当に頭の下がる」「神品」、「嵐」に向つてとやかくと論議する者があるなら芸術の神の怒りにふれて罰を受けること請合である」(雑誌月評『週刊朝日』大15・9・12)、最近「嵐」位評判になった作品はない「文壇の大家も中堅も新進も殆どこぞつて激賞してきただやうである。『嵐』の前では全く無批判だと云つてもいい位の礼讃のしかただった」(古賀龍視「好んで異を樹てる(上)」『時事新報』大15・10・14)、大正一五年度で「最も評判高かつた作品といへば、やはり、島崎藤村氏の『嵐』だったであらう」(鈴木彦次郎「近頃読後感」『文芸時報』大15・11・10)等とある。

しかしながら、このような状況の一因は、付和雷同的な月評が多いという当時の批評界にもあった。舟木重信は、幾十の月評的批評のみが騒々しく、一つの著作集や傾向についての批評が皆無であることへの不満を書き(『月評的批評に就て』『新潮』昭2・1)、

近松秋江は批評が型に嵌っていることを批判していた（現代批評常識の硬化を打破せよ『不同調』昭2・1）。また、「嵐」は近來の逸品であるが、若い批評家や作家に讃美されているのは「意外」（文芸時評 断片語『中央公論』大15・11）という正宗白鳥の評に対して、若手の尾崎士郎は「不満」「文壇的な衆評といふものは常に大家の声に和してひろがつてゆくものである」（『秋宵月評的漫談』『時事新報』大15・11・6）と書いた。

尾崎の言葉を裏付けるように、「嵐」発表四ヶ月後に刊行された『嵐 小説集』の広告文（『東京朝日新聞』昭2・1・4等）には、「天下を挙げて 激賞讃嘆せる傑作 まさに芸術以上の芸術也」

として、一三名の「大家」の「嵐」評が列挙された。往年の世論を先導した徳富蘇峰の「余りに吾心を動かしたるため」「二夜かけて読んだ（原文は「島崎藤村君の『嵐』を読む」『国民新聞』大15・8・27）、小村寿太郎の息子で外務省情報局長であった小村欣一の「深い感銘を受けた」、という文壇外の著名人の評がまず挙げられた。これについては、徳富氏が推賞したために「嵐」の価値が一段と加わることになる事実は「現今の文芸批評そのものの權威なき事の反面である」という声もあった（佐藤春夫「文芸時評」『中央公論』昭2・4）。佐々木信綱と、末尾に並べられた、吹田順助、高須芳次郎、安成二郎、陶山務、下村千秋は、「大正十五年度の作与人」

アンケート『近代風景』大15・12）の「本年度に於て最も推賞すべき作品」に「嵐」を挙げたことが、広告文にされた。その他、中村武羅夫、広津和郎、戸川貞雄、橋爪健、南部修太郎の長い評が広告文として掲載された（以下の論中に\*を付す）が、これらは「嵐」から藤村の、生活、努力、時代や社会との関わり方を読みとり、そこに一つの理想を見た評である。

『嵐』の広告には「此作は、作者が数年来の体験を材としたものであるが、最もよき生活と最もよき芸術との一致がこゝに見られ、最高の芸術と最高の道徳との融合がこゝに見られる」と、芸術と生活・道徳の融和を強調したものもある（『東京朝日新聞』昭2・1・22等）。これらの広告は、「嵐」の読みを規定していくものでもあっただろう。

ただし、「嵐」の文壇での大評判は、発表当初に限られていたらしい。四ヶ月後には、大正一五年に藤村が「持ち囃された」のは新感覺派の作品に対する「反動的現象」だった（鎌山博史「変態的現象」『近代風景』昭2・1）等と書かれた。一年余り後には、発表当時の「嵐」の大好評と「それが間もなく忘れられていった」理由を、「題材の異つてゐる点と久しぶりの力作であつた点」に見た評（湯地孝「藤村氏『嵐』に遊ぶ」『国文教育』昭2・11）すらある。

「嵐」は、発表当初である大正一五年の数ヶ月に大讃辞を受けた作品なのである。

## 二、文壇評価の論点

南部修太郎「九月の創作」(『読売新聞』大15・9・5)には「全篇が忠実宮々たる生活記録である点に於て、これは昨今云ふ処の心境の小説の極致であらう」とある。これらの大正一五年の批評を丁寧<sup>1</sup>に調査した三好行雄氏は「藤村の忠実な生活記録」と読む同時代評の原因に「作家個性の全円と正確にかさなる」「心境小説論の要求」を見た。けれども同時代評の幅を二年間くらいに広げると、「心境小説論」の揺れや、「嵐」評価の多様な論点が見えてくる。

### (一) 作家と作品——「心境小説」論議と「嵐」評

大正末期の「心境小説」論議は、中村武羅夫が「作者がぢかに作品の上に出て来る」「心境小説」の流行に対して、「誰が書いたか」わからなくても「書かれてあるそのもの」に意義のある「本格小説」を唱えた(『文学者と社会意識——本格小説と心境小説と』『小説』大13・1)ことに始まる。これに対して、久米正雄は「作家が自分を、最も直裁にさらけ出した」「私小説」こそが散文芸術の真髄とし、真の意味の「私小説」を「腰の据わり」のある「心

境小説」とした(『私』小説と『心境』小説』『文芸講座』大14・1、5)。論議自体、相当に曖昧なものであったが、個別の作品評は理論より文壇の力学によって左右された。「嵐」を評価したのは、「心境小説」を説いた久米ではなく、「本格小説」を唱道した中村であった。中村は「藤村氏は藤村全集を出したり藤村読本の編集をしたり——余り過去の仕事の整理にばかり没頭し過ぎて一向に作家的の精進も飛躍も示さない事をひどく不満に感じてゐた。ところが今度『嵐』を見て、さういふ不満を感じてゐた自分を責めずにはゐられなかつた。必ずしも作家的の精進や飛躍を示さなくとも、これだけの生活をしてゐれば大したものだと思つた」と書き(\*原文未詳)、新進作家に較べて「芸術家の努力」の見える「既成作家の大御所」藤村の「嵐」を評価した(『芸術家の努力』『東京朝日新聞』大15・9・24、28)。技巧や興味本位の作品に対して「文芸作品に於ける苦悶の意義」(『新潮』大14・5)、「人生のための芸術」(同、大14・8)を説いていた中村は、主に新感覚派の作品に対して、「嵐」を評価したと考えられる。

宇野浩二は、作者の人間性を掘り下げていった「私小説」を「心境小説」とし、一作を読んだだけでは了解できないという「私小説」の問題点を指摘した(『私小説』私見』『新潮』大14・10)。「嵐」でも、これは問題にされた。「嵐」一作ではなく『家』や

『新生』の波瀾ある生涯の記録をよく味得したものに於て、『嵐』の眞価がしみて感ぜられる」と正宗白鳥は評した（『文芸時評断片語』前出）。これに対して尾崎士郎は、『嵐』一作を読むだけで作者の「戦ひのあとの静かな心境」に心ひかれたが、それは「正しい人生の歴史的な展開に対する私たちの敬礼」で「芸術的な感激そのもの」ではない、と一流の大家が「芸術的な検討」を加えずに作者の「生活的苦悶」にのみ作品の価値を求めて賞賛したことを批判した（『秋宵月評的漫談』前出）。

「心境小説」と「本格小説」という問題は、大正一五年に「第一に所謂文壇で取り上げられた題目」であつた、『私小説』と称するものは所謂『本格小説』の一面であり、「心境小説」は「私小説」とは異なり「簡素な筆致の中に日常生活的心理の陰翳をつかまへ」るかわりに「周囲のすべての人間との交渉の如きは甚だ朦朧」となつた『散文詩』である、と佐藤春夫は書いた（『文芸時評』『心境小説』と『本格小説』、『中央公論』昭2・5）。主に中村、久米、宇野、佐藤と続いた「心境小説」論議で、「心境小説」「私小説」「本格小説」の定義には振幅がある。「嵐」は、この曖昧さを突く作品でもあつた。「嵐」の「生活体験の力」が読者を圧する「誰があれを身辺の雑事を取扱つたものとして軽んずることが出来るか、誰があれを本格小説でないと言ひ得るか」（加藤次郎

「この頃の日記から」『文芸時報』大15・9・10）、「芸術的趣向を凝らす」藤村のような態度で臨むなら、「心境小説おのづから本格小説の形を執り、逆にまた本格的な小説にも心境の深さを宿すことが出来はしないか」（戸川貞雄『文芸時評』『不同調』大15・11）等と書かれたのである。

三好氏が「当時の心境小説論の常識」の論拠とした谷崎精二の「作家と私生活」『読売新聞』大15・9・15、16）は、作品を味わうためには作家の私生活を知ることが必要、即ち作家は「生活を蔽ふ処無く」作品に示すことが大切であると説いた。これに対しては、実生活に対する知識なしに鑑賞批判できないような所謂私小説乃至心境小説に散文芸術としての客観的な価値を認められるか、実生活に対する知識が作品の鑑賞批判を左右してはならないという戸川貞雄の批判もあつた（『知識階級の立場から』『太陽』大15・11）。岡田三郎は、藤村の實際生活や時代に対する読者の知識の有無によつて鑑賞の深度に差が生じる「嵐」は「客観的妥当性に欠けてゐる」が、「客観的妥当性」のために「却つて読者の感興を殺ぐこともある、と創作上鑑賞上の「疑ひ」を提示した（『一つの疑ひ』『新潮』大15・11、この後『太陽』誌上で戸川氏と論の応酬があつた）。

このようにみると、「心境小説」「私小説」は「主人公即作者」と読まれてきたという定説にも若干の疑問が生じる。「嵐」

が当初「芸術品といふよりは、作者の生活に対する實際的興味でかれこれ言はれた」（中村星湖「今年小説壇の回顧」『早稲田文学』大15・12）ことは事実である。武者小路実篤「文芸雑感 藤村の嵐をよむ」（『改造』大15・10）には「藤村と云ふ人の生活記録」「藤村の生活を自分は最上のものとは思はないが」「尊敬していゝ」とある。『嵐』を読んで自分はさながらに藤村氏の生活を窺ふことが出来た、「真面目さと謙譲さ」に打たれた（藤森淳三「島崎藤村氏と徳田秋声氏」『太陽』大15・10）等という評もある。これらの評は確かに「主人公即作者」と読んでいるといえよう。

しかし、作者と主人公との区別を意識した評もある。広津和郎は「味へば味ふ程、この作家（以下傍点論者）が長い年月の間文学に生命を打込んで、次第々々に積み込んで行つた並々ならぬ用意が、感ぜられて来る。同じ事はその生活に対してもいへる。驚くべき忍耐さで、その子供の成長を見つめ、はぐくんで行く主人公の生活態度——それは我々にいろいろなことを考へさせた」

（\*、『初秋雑筆』『報知新聞』大15・9・3）と書いた。「その生活態度の真剣さ、その生活感情の美しさ」が「詩の気品を全篇に漲らせ、涙含まずにはゐられなくなる。涙含んだ眼の向ふに、紙背に、作者の姿が、生活が、孤り寂しく浮かんで来る」（\*『九月の創作』『早稲田文学』大15・10）と戸川貞雄は評し、下村千秋は「材

料と作者の距離及びピントが実にピタリとした点に敬服した」（距離・ピント・狂ひ『太陽』昭2・2）と書いた。「心境小説」である「嵐」の「題材をそのまゝ氏の実生活と心得ることは、或は間違つてゐるのかわれない」、「主人公」が人生・生活を凝視している態度に感服した（野島辰次「頭の下がる作『不同調』大15・10」、「心境小説に於ける謂ゆる『私』なる主人公が作者自身であると言ひ切ることの危険」は知っているが、「嵐」の「私」が「作者自身とびつたりして居るのを感じ、人知れず藤村氏の生活に対して襟を正した」（川崎備寛「島崎藤村氏の『嵐』を読む」『太陽』昭2・4）という評もある。作者と主人公とに距離を置こうとした評者も相当いたのである。

## （二）構図・構成

「嵐」の「構図」「構成」に着目した同時代評は、実はかなりある。正宗白鳥は早くに「書出しの背丈くらべから結末の子供の送別会まで一篇の結構をキチンと調へてゐる。不用意に書流してゐないで、自然に起伏する人生の事実のうちに文章の法則を見えてゐるのは、例の藤村式」（『文芸時評』『嵐』と『元の枝へ』『中央公論』大15・10）と書いた。湯地孝「藤村氏『嵐』に遊ぶ」（前出）は、整然と組立てられた構図に着目し、「子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集つて、そこにある柱の側へ各自の背丈を比べに行つ

た。次郎の背の高くなつたのにも驚く」と次郎に始まり、次郎の  
 出立に終っているということが作の統一上から適當である、多く  
 の材料の中からエキスのみをとって短篇に圧縮し、一つの気持ち  
 を書き出すには非常な手練が必要である、と指摘した。さらに

「嵐」のよさは、そういう小説的な巧みさよりもむしろ「作者自  
 身の生活の自らににじみ出している点」で、作者自身の落着い  
 た心境を骨子とした「心境小説」、読んでいる間だけはいい気持  
 ちになれる芸術味という意味から「一つの散文詩」である、と書  
 いている。一方で湯地は、藤村の生活態度は既に定評のある処で  
 「嵐」に現れているものも定評を裏切らない、「事実は、事実であ  
 るが故に尊しとも尊し」とも書いている。この「事実」は、「忠  
 実な生活記録」であることを要求するよりも、絵空事ではない事  
 実の裏付けという權威を与えるものであろう。

「ある著作が人生の好い記録であれば、その事が既に貴い。そ  
 れが創作と云はれるほどの域に達したものでならば、更に貴い」  
 (藤村『春を待ちつゝ』大14)を引いて、「嵐」を「単なる生活記録」  
 でない「氏自身の全生活の文芸的表現であり、創作」と武藤直治  
 は書いた(『島崎藤村小論』『改造』昭2・4)。藤村『後の新片町よ  
 り』(大2)の「芭蕉の一生は生活を芸術とする努力だった」とい  
 う説は藤村の一生にもあてはまる、「身辺小説」「嵐」は「人生経

験の充分豊富になつた作家の、素晴らしい構成力によつて、完全に  
 組立てられた人生図である」と読む水上龍太郎の評(『島崎藤村先  
 生の足跡 貞毅追放』『中央公論』昭4・7)もある。

### (三) 老大家の作品

明治大正の文壇で、新体詩を完成し、自然主義を先導し、『新  
 生』を書き、「嵐」を書いた当時の藤村は、すでに「老大家」と  
 呼ばれていた。「嵐」を読むと、明治以来の日本文学もある一面  
 では老いたことが感ぜられる、青年である子の立場から父を扱う  
 小説はあつたが「老人の心境」を写したものは極めて稀であつた  
 (正宗白鳥「文芸時評『嵐』と『元の枝へ』前出」という評もある。  
 藤村は大正一二年の年始めに脳溢血に倒れ、一月近く静養した。

『嵐』の後語には「長い病に妨げられて、こんなにたどくしい  
 歩みを続けて来た」とある。「嵐」執筆中の藤村を訪問した武藤  
 直治が、「人間はみんな、仕事を完成しないで死んでしまふんで  
 すね。このごろしきりにさう思ふ」「一年ごとに書いてゐる作が  
 まだ出来上らないんです」という藤村の言葉を伝えている(『島  
 崎藤村小論』前出)。藤村文学における位置づけとして、五五歳の  
 作品「嵐」が大作『夜明け前』への契機であることは動かないが、  
 「嵐」執筆当時の藤村に『夜明け前』を射程におく体力的余裕は  
 なかったのかもしれない。

「嵐」は、徳田秋声「元の枝へ」と同誌同号で発表された。共に既成作家の活躍を示すものとして好評を得、老大家・既成作家に対して中堅新進作家がふるわないという論議を引き起こした。

「老大家諸氏が、異常に目ざましい活躍振を示し」「中堅及び新進の作家が、近来あまり振はない」（加藤作次郎「この頃の日記から」前出）、「いつが来ても、藤村秋声であることは、日本文壇のためにはむしろ悲しむべきである」（『文芸春秋』欄『文芸春秋』大15・11）等とある。「多くの青年達が、何時迄も頑張つてゐる父の蔭に、若くして朽ち、或は待ち草臥れて来た」（三宅幾三郎「文壇を下さい」『文芸時代』大15・11）とすら書かれた。大正一五年の文壇は、「新感覺派」はふるわず「新人生派」は声をひそめ「コント文学」は全く影を消し「農民文学」と「プロレタリア文学」とが叫びをあげたのみで、活躍は、藤村、秋声の既成作家にあった（佐左木俊郎「本年度文壇概観」『文芸時代』大15・12）と振り返られたのである。賞賛の一方で、「老大家」の作品「嵐」は批判も受けていた。

「無産派文芸批評」（中村星湖「今年小説壇の回顧」前出）を書いた青野季吉、片上伸の評が評者達に注目された。青野（『新批評時代』）でやったことに満足と希望を抱いている藤村の心も「父親の心頼みのはかなさを感じ、憐みさへも感じ」た私の心も「現実立つ

てゐる」、藤村と私には「自作農の現実の生活」に対する「は握のしかたのちがひ」がある、として文芸批評における二つの現実の対立、論争に着目した。青野評は、長男を帰農させた事実に対する疑義と受け取られ、文学がわからない論者の評、そこを考へざるを得ない等という議論を引き起こした。片上は、「嵐」は旧来の文学上の手法態度を練り上げた、自然主義文学の殆ど完成せられた作品と見るべきで、「嵐」が衆評の的になつたのも、今の文学界の支配的傾向である文芸至上主義的傾向を代表するものであるから受け入れられやすく、手法態度の鍛錬が優れているからである、と論じた（『文学を知ること』『不同調』大15・10、「批評の時代」『新潮』大15・11等）。

「如何に傑作であるにせよ、藤村氏の呼吸はもう我々の時代の呼吸ではない」（古賀龍視「好んで異を樹てる（上）」前出）、「主人公の子供に対する見方感じ方或は作者の人生観など、我々とはかなり縁」が遠い、「矢張り年齢の相違がさうあらしめるのだらう」（豊島興志雄「きれぎれな感想」『文芸時報』大15・11・25）とも書かれた。「二人の人間があゝいふ境遇であゝいふ精神的な境地に這入つてゐるといふ事が、我々にとつていつたいどうしたといふのだ」（石濱金作「文壇雑文」『文芸時代』大15・12）、「礼讃は単なる『挽歌』としか聴かれなかつた」（片岡鉄兵「此処に在る！」『文芸道』昭2・

2)、「一時代または二時代前のインテリゲンチヤの今日に於ける姿」を知る(川端康成「文芸時評『文芸春秋』昭4・8」という新感覚派からの評もあった。「嵐」は、新しい文学に影響を与え得ない」と批判されてもいたのである。

#### (四) 詩、道徳・倫理

「嵐」の詩情と倫理性は発表当初から注目されていた。「無韻の詩」(徳富蘇峰「島崎藤村君の『嵐』を読む」前出)、「中等学校専門学校の教科書として或はむしろ倫理の教材にまで、この作品を採択すべし」(戸川貞雄「偶感」『不同調』大15・10)等と書かれた。

宇野浩二は、藤村の「私小説」が歓迎される理由に「いゝ意味で通俗的なところ」を挙げ、「嵐」の主人公「私」が「襟を正させるやうな人格者である」、明日越すかも知れない借家の障子の切張りをする等の「驚くべき質素な生活振」は、作品の価値とはかわりはないが、一般読者に或感動を与え、作品を貫く詠嘆調が読者に共鳴される、「嵐」には藤村の「伸び仕度」のような「何かもつと深いものゝ目が、同時にその主人公を見てゐるやうな深刻さ」はないが、「巧みな歌を聞いた後の酔心地と甘さが残る」、「人は所謂旧道徳味に知らず知らず胸を打たれる」と書いた(「文芸時評 小説道管見」『新潮』大15・11)。この評は、多くの支持を受けた。

「新潮合評会」(『新潮』昭3・11)では、藤村は醜惡面を避け美しさに眼を向けようとし、「嵐」も人生に肉薄する力が薄く物足りないという見方が共有されている。二年余り後には、「嵐」と事実との相違が前提となつていたのである。「嵐」は「性欲の悩み」を避けている(尾崎士郎)、「性欲の跳梁を望むことはバライティを作品に望みすぎる事」であつて「嵐」はあれでいい(淺原六朗)、藤村はロマンチズムの芸術から自然主義の芸術に移ろうとする過渡期の芸術である(勝本清一郎)等と議論された。醜惡面の回避の原因を藤村が詩人であることに見る多くの意見に対して、宮地嘉六は「明るい方向へ感情を持つて行かうといふやうな社会人としての心の持ち方をとらなければならぬ」という「倫理的要素」の強調に原因を見た。詩的、道徳的・倫理的であることが、藤村の作品の欠点でもあり、特長でもあると考えられていたのである。

#### (五) 時代との関わり

「嵐」に描かれた時代相については賛否両論ある。「嵐」の父親の心境における時代相については、いくら明日が来ても同じことだという所に、時代に対する憂慮が現われているという近松秋江の発言(「新潮合評会」大15・12前出)等、評価が高い。橋爪健は『子供の世界』に喰ひいる作者の柔かな鋭さ——私は子供に対す



るドフトエフスキイやシャル、ルイ、フィリップの魂を想ひ較べた。その子供らに対し、次第に展化してきた父親の心情に於いて、作者はまた『時代』に対する作者の態度をも暗示してゐる

『私達への道』は単に親子だけの間ではない。時代も社会もみな『私達への道』へ進んでゆかねばならない。——私はそこに作者の理想主義を瞥見した」(前半\*、「新秋收穫」『時事新報』大15・9・

2)と書いた。私と子供達だけではなく、私と時代・社会との通路が開けてきた、という読みである。武藤直治も「四人の子供たちの、各々の才能や体質に応じて生きてゆく道を考へてやる父親の心、それが同時に、父親自身の生きて行かうとする意志のうごきでもある」と読み、「嵐」は藤村の七年間の苦悶と闘争の跡の「自己告白」であると同時に「新しい時代と社会環境とへの接触点を求める意志を表白」したものであると書いた(『島崎藤村小論』前出)。

一方作品に描かれた時代相については、新時代を見る旧時代人の偽わらざる心境と時代相を描いているが、在来(在来)の文学鑑賞で重視された作者自身の比重の方が時代相よりも勝っている(神部孝「触覚と比重と主観」『太陽』昭2・1)、子供の成長と社会思想の変遷との変化流転の中に嵐を感じながら「その嵐に対する充分なる把握のなかつたこと」は残念(浅原六朗「老大家論」『不同調』昭2・

10)等と評された。

評価の違いから、「嵐」の時代相が、子供を通して時代・社会への接点を求める父親の心境に焦点をあてて描かれたことが、逆に見えてくる。

#### (六) 土の文芸

大槻憲二「文壇近事抄 理解せられざりし『嵐』」(『早稲田文学』昭2・2)は、「嵐」を「土の文芸」とし、「嵐」の中には「大都會には真の生活がない」と云ふやうな都会否定の明白な言葉があるに拘らず、多くの批評家が「藤村の父親としての心境にのみ」注目したことを批判している。高橋昌子氏が「大正後期は『農』についての論議の多い時期」と指摘しているが、「嵐」が発表された大正一五年には特に農民文学が盛んに提唱され、「早稲田文学」(「土の文学」八月)、「文芸戦線」(「労働文学及農民文学の研究」八月)、「太陽」(「農村不安号」九月)、「解放」(「農民問題号」一〇月)、「地方」(「農民生活の研究」一〇月)等の雑誌特集で議論された。それらに書かれた農民文学の定義は幅広いが、『文章往来』藤村号(大15・4)に載った加藤武雄「農民文芸に就て」には、大正一二年の大震災で崩壊、滅亡しつつある都会文芸の生命は、地方の土から生れた精神によって救われなくてはならない、とある。このような農民文学論に触発された「土の文芸」として「嵐」を見る

ことは、可能であろう。

### (七) 伝統的な味わい

『菊の香や奈良には古き仏達』私はこの句が好きであるが、『嵐』にはさういふ味わいがある(正宗白鳥「文芸時評 断片語」前出)の「味ひ」に「嵐」好評の理由を見、芭蕉や西行のような「一種求道的な精神と簡素な生活、如何にも日本人の好む伝統的な詩を、藤村氏は現代調で歌つて聞かせた」(今年の小説「近代風景」大15・12)と細田民樹は書いた。芭蕉以来、日本の芸術の根本をなしている東洋的虚無と詠嘆とを織り込んだ含蓄のある文章(健山博士「変態的現象」前出)という評もある。

「嵐」は「心境小説」論議の盛んな当時の文壇で、「心境小説」と「本格小説」、作家と作品等、様々な議論を引き起こしていた。発表当初の「嵐」評には、作家藤村の生活や態度への批評と結びついたものが確かに目立つ。けれども少し後の評まで見れば、作家の生活と作品との相違を意識して、作品「嵐」自体の構成や詩情、倫理性等を論じたものも相当あったのである。

### 三、一般読者の人気

「嵐」は一般読者に根強い人気があった。「嵐」発表翌月の『改造』『編輯後記』(大15・10)には「我々は雑誌編輯に十年近く

当っているが文壇以外の社会人からかくの如く歓呼された小説は始めてであつた」、作品の良さだけでなく、藤村が八年間も「妻らずして忍従の生活をなした同情すべき態度が大衆に感激を与へた」ことによるのだろう、と書かれた。一般読者の人気は、「一挙、三万部を突破す」(『東京朝日新聞』昭2・1・22)、「昭和劈頭の出版界を驚倒せしめた売行間断なき増版印刷。既に三万部を超ゆ」(『新潮』昭2・2)、「売行き依然として急!! 第六十一版出来せり」(『新潮』昭2・12)といった『嵐』の広告にみられる売れ行きの良さにも現れている。日比谷、帝国、大橋の三大図書館が、一年間に最も多く読まれた「推薦八大名著」を選定した中にも『嵐』は入っている(『新潮社広告』『新潮』昭2・12)。読売新聞社が、昭和年代に出版された最も感銘深い良書を一ヶ月間一般投票した「読売文献賞」(御大典記念)にも、『嵐』は入賞した(得票数第12位。昭3・12・3)。この一般読者の人気は、「嵐」を解く重要な鍵であらう。

人気の理由はまず、子供のための父親の「忍従の生活」という非難を拒む聖化されやすい題材にあつた<sup>1)</sup>だろう。それが、父親の生活の見本となる「善き参考書の一種」(川崎備寛「島崎藤村氏の『嵐』を読む」前出)、「あたしにもあんなお父様が欲しいなア」(鷹野つき「処女地」時代の藤村先生、秋田雨雀編『島崎藤村研究』昭9所

収」と読まれるように描かれている。「餌を拾ふ雄鶏の役目と、羽翹をひろげて雛を隠す母鳥の役目とを兼ね」る父親という「嵐」本文中の説明等によって、「嵐」の読みは方向づけられているのである。「私は子供を叱る父であるばかりでなく、そこへ提げに出る母をも兼ねなければならなかった」とあるすぐ後に「母さんでも生きて、御覧、どうして言ふことをきかないやうな子供は、よつぽどひどい目に逢ふんだぜ」とあるように、実際に母がいれば「提げに出」てくれないかもしれない。「嵐」は、そうあってほしい、そうありがたい理念としての親を描いているが故に、一般読者を感動させたと考えられる。

しかもそれは、藤村の実生活の裏付けという重みを持っていた。藤村自身すでに、「何か一つ力になる方法を探らす」考えから長男は農業に従事させ、次男三男は川端画学校に通わせている（『飯倉だより』『女性』大12・2）、一昨年あたりから子供の一人を農村の方へ送っている（『農民のために』『春を待ちつゝ』大14所収）、自分は飯倉片町の借家に八年も住みながら、郷里の長男楠雄のために農家を買取った（身のまはりのこと『改造』大14・6）等と、「嵐」のもとになった事実について書いていた。「お話を太郎や、次郎や、三郎や、それから末子にするつもりで」「郷里の方に働いて居る太郎のことを思ひ／＼書きました」という『をさなもの

がたり』（大13）等、藤村の童話に出てくる子供達と「嵐」の子供達とは、名前や状況が同じですらあった。藤村の童話は教育界で推薦されており（『子供の読物 どんな物が良いか 倉橋文学士談』『読売新聞』大7・7・10等）、『藤村読本』は全国の中高等学校小学校の副読本に採用されていた（広告『国民新聞』大15・9・12）。「嵐」はこのような作者の書いた、父と子の小説だったのである。

「嵐」は子供の教育への当時の高い関心に応えるものでもあったことが、全集未収の藤村の談話等からわかる。「島崎藤村氏が小学卒業の令息に 直ぐに専門教育をする」（『読売新聞』大10・11・3、全集未収）は、「人間には何かしら持つて生まれた或る特異な才能が恵まれてゐるはずですから、ほかの学科に万遍なく精力を消費してゐる間に切角延びる本質的なものまで毒されて終つてはいけないと思つて居ましたが鶏二だけは殊に子供の時から絵を描くことが好きだったものですから恰度友人和田英作さんの勧めで川端画塾へ入れたのです。兄や弟の方も（中略）当人に向いた方面さへ見つければいつでも中学をよして専門的な仕事に就かせようと思つて居ります」等という藤村の話を載せている。川端画学校研究生は中学三年修了以上の学歴が必要で次男鶏二も三男菊助も規則違反（島崎菊助『島崎菊助自伝——父・藤村への抵抗と回帰』平14・8）、当時でも早い専門教育であった。「藤村氏がお子さんの

持つて生れた才能を深い理解の眼で発見して義務教育を終へると直ぐ其の方の専門教育の道を選ばれたので子供の天分など構はず何でも中学から大学へと進ませる世間の親達に好い参考でせう」という記者の言葉をみれば、これは一つの模範となる選択であつたことが窺える。

「嵐」前年の『読売新聞』には、「二代目」（大14・1・17〜2・7の20回）、「父と子」（大14・5・30〜7・11の20回）が連載された。二代目（十八）（大14・2・5、全集未収）には、「島崎藤村さんの書いた童話集『ふるさと』、そのふるさと信州木曾谷の神坂村」へ「今度は倅を帰へしたのです」、「明治学院の中学を五年迄やつたのですが学校から帰つてもどうも余り元気がない、成績も中の上位のそこなもんですし、一つ百姓をやつてみたらどうかつて云ひましたら是非にと喜びましてね丁度三年程前になります（中略）都会で育つた人が農村の生活などを少しでもやると心持もからだも見違える位元気になるものでしてね（中略、暮れの年取りに倅が停車場から行李をかついで歩いて帰ってきた）こんな元気になつたんです」とある。「嵐」が、次男の専門教育ではなく、長男の帰農を中心に描かれたことは、都会と農村というテーマの比重の大きさを示しているだろう。「父と子（十九）」（大14・7・8全集九巻所収）は「私共の血の中には、何かさういふ方面に向くやうなもの

が流れてゐる気がする」私自身の中に画家になる素質の一部分や百姓になつてもいいという一部があることから子供をその方面に向けてみた、というものである。

『文章往来』藤村号（大15・4）には、「嵐」に引かれた楠雄の「子の見たる父藤村」、藤村の「飯倉町の庭を背景にした横向きの上半身座像」の写真、鶏二の画「朝（父の郷里神坂村にて）」が掲載された。「嵐」に描かれることを先取りした形である。

当時のメディアの、子供の教育や「二代目」「父と子」に対する関心は、すなわち読者の関心であつただろう。藤村は、自分と子供達のことを世間の関心事であると十分意識していたと考えられる。藤村と子供達のこととは、世間の関心事への一つの模範的な答えとして読まれることが予想された、書かれるべき題材としてあつたのである。

## 結 び

「嵐」は、発表当初の数ヶ月、ほぼ全文壇からの讃辞を受けたが、これには付和雷同的月評が多いという当時の批評界の事情があつた。新しい文学に影響を与え得ない「老大家」の作品という批判も一部にはあつた。大正末期の「心境小説」論議は、論者や状況によつて「心境小説」「私小説」「本格小説」の定義が揺れ、

論議と作品評が噛み合うとも限らないものであった。「嵐」は、「心境小説」でありながら「本格小説」ともいえるという議論や、生活と芸術の融合に対する高い評価、あるいは生活への敬意と作品評価を分けるべきという議論など、さまざまな議論を引き起こしていた。「嵐」の「私」は必ずしも「即作者」とは考えられておらず、「嵐」という作品自体を論ずる批評も相当あった。「嵐」の構成、詩情、醜悪面の回避、伝統的な味わい等は同時代評においても着目されていたのである。

一般読者の人気も「嵐」の特徴であった。藤村の子供達のこと、全集未収の『読売新聞』記事等でも知られていた。「嵐」の長男の帰農は、子供の教育や農村（都会に対する地方）への関心の高かった世間に一つの答えを提示するものでもあったのである。

「嵐」の評判の理由は、「嵐」が、体験という權威の裏付けをもって、父親の子育てという聖化されやすい題材を、詩的、道德的、理念的に描いたことにあった。さらに、子供を通して時代・社会への接点を求める父親の心境に焦点を絞りながら同時に時代の関心に応え、様々な論点・話題を提供したことにあつたのである。

## 注

- (1) 「嵐」の意味——青山半蔵の成立」『島崎藤村論』筑摩書房 昭59。

『藤村全集別巻』（筑摩書房 昭46）に、いくつかの同時代評が収録されている。

- (2) 近年には、鈴木登美著 大内和子・雲和子訳『語られた自己 日本近代の私小説言説』（岩波書店 平12）等の論考がある。

- (3) 作品名を挙げた四六人中一〇人が「嵐」を挙げた。

- (4) (1)に同じ。

- (5) プロレタリア作家の葉山嘉樹、林房雄等は「嵐」を評価した

（新潮合評会）『新潮』昭2・1。

- (6) 『島崎藤村 遠いまなざし』（和泉書院 平6）。

- (7) 「藤村詩集」や有島武郎の小説に較べれば「今の所謂大衆文芸はずつと読まれてゐない」（橋爪健『通俗第一』（上）『読売新聞』昭2・2・11）等、作家藤村は人気があつた。『新生』は「さういふことを決して為さうにない人の、真個の失策であるといふ感じを読者に与へ」、藤村が繰返して書かないので一般世間には疎遠な事件となり、世人は「嵐」の父親ぶりに敬意を払う、と近松秋江は分析した（『芸術と実生活の問題』『新潮』昭2・8）。

——ながふち ともえ・神戸女子大学助教授